桃洞遺筆 第二輯 卷上

特別
二1
4263
4

二1
4263
4

嘉永三年庚戌十月刻成

蘭峡小原先生輯録

桃洞遺筆 二編 三冊

發行書房 眉壽堂 世壽堂

桃洞遺筆卷之四目録

天蠶絲
磁石毛
鱧魚
毬蘭
盍藤子
一指石
小異魚
緬茄
荷包牡丹
蘭花豆
鰈魚
蜈蚣蘋
蕃栃
荻蘆竹
松蟲 附鈴虫
鱸魚 附鱚魚 江鱚魚

内閣文庫

猨（てうぐる）

山椒魚（そんしやうを）

丹生村大樟樹（かうのおのくすを）

桃洞遺筆巻之四

紀伊　小原八三郎源良直　録

天蠶絲（テグス）　附天蠶蟲

今漁人釣繒ゑ用ふるテグスを。國ゑよるりグ〻も。グスゝも。スヂ〻〻〻。漢名天蠶絲。南寧府志廣東新語一名天蠶綢。廣東通志楓絲。粤西偶記楓蘭絲。本草綱目蟲絲。圖書編明一統志漳州府志〻〻〻。舶來多〻。其品一ならず。大抵ハチモトとヤマの二

名を分ち。其中より絲の大小色の異なるあて又品名を分てり。チモトを絲圓し。中をナンメと稱するを上品とす。ヤマを絲微く扁く技いり。又サカテグスといふ。節の如きを付着り常のテグスを白根の處末ゐり。この末より裂(サケ)本なり。サカテグスを。白根の處末ゐり。この末より裂(サケ)ハ苧屑(クズ)の如く成る。下品ゆゑて其値賤し。往昔ハ志のテグスと何物とも志れず。或を海艸の茎とし。或ハ海艸の根とす。誤の甚しきを付なり。其後テグスを焼て絹絲の臭氣をかぶとし。明清の諸書に載る說と併せ考へて。蟲絲なる事を志れとる。又何の象より生ずるとを知らざるまい。本邦に産せざる物とす。青木敦書が昆陽漫錄(巻三)に。南方熱國ノ物ナルベケレ氏。種ヲ得テ試タキモノ也」とあり。漸享和壬戌の年。土佐の宮地郁蔵(維則)常毛採藥錄を撰して。其附錄に始めて伯耆の方言。スカレダワラなるとをかく。それど其製法を不識して。只傳聞のまゝ記せり者なり。其文に曰。先年薩州ノ人。琉球ニ在テ蟲絲(テグス)ヲ作ルヲ見テ圖シテ歸ル。其繭伯州ノスカレダワラト全ク同シ。然レドモ

既ニ繭ヲナスモノハ絲トナラズ。甚蟲ヲ養ヒ絲ヲ作ラントスル時ヲ候ヒ。蟲ヲ煮テ絲トス。是ハ琉人ノ極秘ニシテ薩人ニモシラシメサルヨシヲ聞ケリ」と云り。按ずるに。此蟲今諸州深山中ニ有り。多くハ栗と漆の二樹ニ産ス。又稀ニ櫧(カシ)槲(クヌギ)櫟(イチイガシ)椨(タブ)ノ木ソ子ノ木等ニも産ス。俗ニワリブリツクリ。下野南摩シナン太郎。下野久野シナノ太郎。信濃山椒太夫。同上栗ニ生ずるニ限りとせらるゝ又大和十津川奥ニてハ崖椒ニ生ずるニ限りとせらるゝ白子太夫。阿波祖谷白ケムシ紀伊熊野及在田郡山保田

の大さ二寸七八分許。色青く頭と足と黝黒色尻ニ同色の剣ありり。又食ふ木葉ニよりて甚色種々ありり總身ニ皆長き白毛ありて毛蟲(イラムシ)の如し。而して手ニ捕ふまも人を螫ス。此蟲を養ふに。栗ニても漆ニても多く植ゑて。四方ヘ溝を堀り。形小なるを諸山ニ有るを捕ヘ來り。其樹ニ放ちべし。溝ありれば蟲外ヘ遁去る。最露天ニよるべし。四五月の間此蟲を生ずるゝ力ゝて堅ニ裂き。腹中ニ柔なる二條の縮絲ありり暫く醸醋中ニ浸し置き。採り出して援引ずべし。大なる者ハ

大抵長さ五六尺ある至る。蟲の食ふ葉によりて絲の軟硬あり。色の種々あり。又雄絲は圓く。雌絲は微の扁なり。所謂チモトとヤマの別あり。又砂も雄は圓く。雌は扁なり。又蟲老まい白根多く。若まい白根少き程力弱し。宜く中を採るべし。此絲と採る大の時と爭ふ者なり。此蟲と其まゝ養ひ置けば。後の口中より絲を吐き繭を作る。長さ二寸許。濶さ五六分。兩頭尖り褐色なして。光澤ある絲縱横の交糾して羅網の如く。至りて堅し。此も亦數色あり。因幡伯耆邊にもあり。

スカシダハラといふ。又ホトヽギスノクツ。ムセン
テウノクツ。アミブクロ。大和十津川　ヘチマ。越中　神
ノガラく。信濃美濃　山姥ノ袋出羽　等の名なり。此外方
言多うるべし。信濃にて。此繭を正中より横に切て。指
の先に入れ。水田中の艸を採るに用ふ。此繭にてテグ
スと製造する者と誤り思ふ人多し。其製法及蟲を養
ふ法。猶詳なる事ハ別に録するとて茲に贅ず。此

蟲の漢名天蠶廣東新語　絲蟲潛確居類書　楓蠶事物紺珠留青日札
樟蟲漳州府志物理小識

直按るに。天蠶と絲蟲ハ總名なり。楓葉を食ふを
楓蠶といひ。樟葉を食ふを樟蟲といふなり。南
寧府志巻三に云。天蠶絲。楓始生蟲。多食葉。似蠶而赤黑。
四月熟。如蠶將絲。土人取之。其絲光明如琴絃。海濱蚕
人鬻之作釣縑　潛確居類書巻百十七に云。絲蟲。生南寧
州。食楓葉能作絲。光明如琴絃。　漳州府志巻三十八に云。
樟蟲。如指大長數寸。綠色。以醋洗之去肉。其中有絲抽
出丈許。名曰蟲絲。　物理小識巻十二に云。樟蟲。入醋死。
引腹中筋長丈餘。閩人用綠蒲裹楓蠶之絲。亦韌可作

木釣繒凡樹蟲如蠶者。皆有絲成繭成蛾熏紙甲皆厚。

廣東新語（卷二十四）云。天蠶出陽江。其食必樟楓葉。歲三月熟醋浸之抽絲長七八尺。色如金堅韌異常。以作蒲葵扇緣名天蠶絲亦有成繭者。大於家蠶數倍。歸貢厥篚檿絲。或即此類。然不可繅為絲。入貢者。齊魯之山繭也。有沙柳蟲。腹中絲。亦可作緣。沙柳蟲也亦天蠶の屬なり。東安縣志（卷四）云る天蠶を載せる外ゑ。沙柳腹中絲可縫葵扇と見えたり。

荷包牡丹

今人家及花戸ゑ多くうゑる。花鬘草ハ。一名花鬘牡丹フヂ牡丹　クサ牡丹（信濃）　瓔珞牡丹（仙臺）　巾着牡丹といふ。秘傳花鏡（五）ゑ載せる荷包牡丹なり。一名魚児牡丹。以其葉類牡丹。花似荷包。亦以二月開。肉是得名。一幹十餘朶。累々相比。枝不能勝。壓而下垂若俛首然。以次而開。色最嬌艶。根可分栽。若肥多則花更茂。而鮮黃梅雨時。亦可扦插。るゑて形狀明なり。魚児牡丹の名を宋の時より呼べるゑや格致鏡原（卷七十一）ゑ。宋の周必大が魚児牡丹の詩の序を引て云。涓之湘中。花紅而蕋白。狀類雙魚。累々相

比枝不勝壓而下垂。直按廣羣芳譜卷三十三所引。此下有若傍首然。皇目良可辨九字

葉與牡丹無異。亦以二月開。直按同書此下有因是得名。其幹則芍藥也。余命曰花嬪。而賦是詩。用江東中谷間甚多。三十七字。○又同書又周必大ぶ七言律詩。及趙中甫。李子權。楊延秀の三人。周氏が韻を次て作る詩等を載せり。こゝに畧ぶ

花卉百種。穿線牡丹。

本藩山中信古云。此草なり。朝鮮牡丹の名いり。清の高士奇が苑西集卷五に。朝鮮牡丹を題せる詩三首を載せ。第一詩の。瓠子含新蕚。荷囊綴細枝。の句註ふ。俗呼爲荷包牡丹といひ。第三詩の。弱蒂看成串。鮮葩巧合雙の句註に。越中名線穿牡丹といふ。直按こゝに六研齋二筆卷三ふも此名いり。花卉百種と。線穿の字相反ぶ。直云。又清の朱彝尊が日下舊聞卷十八補遺男昆田輯に。六街花事を引て。荷包牡丹。草本。一名朝鮮牡丹。花似僧鞋菊。而深紫色。其以牡丹者。因其葉相類也。京師槐樹斜街。慈仁寺藥王廟花市恒有之といへり。或說に。此草。本邦にも延寶年中唐山より始めて來るといへり。開白魚良公の天素往來に。華鬘花と出せるもこれなり。延寶より二百年餘以前ふに。猶いりし草なり。本草綱目啓蒙卷二十二ふ。木曾山

中ニ自生アリ」といへり

磁石毛

證類大觀本草（巻四）に。蘇頌本草圖經ニ曰。磁石。其石上（本綱巻七）有ル孔々中黄赤色。其上有ル細毛。性温。功用更勝。（石上作ニ石中。本草原始巻十一石上作ニ石黑色）本草啓蒙（巻六）に。磁石毛ハ。自然ニ沙鐵ノ附タルモノ。久シクシテ。褐色ノ毛ノ如キヲ云フ。といへり。按ずるに。磁石面上微〻凹ふして周邊（クルリ）る痱瘡（イボ）いる處ハ鐵色深く。能鐵を吸ふもの也。此處を。鐵椎をもて數十遍輕く打て。自然に黝褐色の細毛を生じ。こ絶磁石毛なり。

蘭花豆

清俗紀聞（禮俗）に。七月七日家々菊葉（キクノハ）。菱子（ヒシノミ）。茄子（ナスビ）。蘭花豆。麥の煉粉を附。油あげて揚食を。是を巧菓（ツクリ）云。注に。蘭花豆ハ。蠶豆（ソラマメ）を水に浸し。皮を去り。四ツに割目を入。油にて揚る也。蘭花の形に形るなり」といへり。按るに。明の王仲遵が花史左編（巻二十三）に。蘭花豆。嘉禾風俗。取蠶豆（ソラマメ）毎粒破為ル四葉。菜油沸之加ル以香料焙燥。狀如ル蘭花。味為ル上品。といへり。是なり。今本邦にて製して售る

の多し。

鱧魚

一名蟲魚。神農本經 本草和名第十六卷に蟲魚。和名波牟。和名鈔卷十九に鱧。和名波無と訓せるより。今に至り其誤り來ること久し。

直云。又醫心方。卷一卷三 康頼本草。魚部 伊呂波字類抄。一卷等に。皆誤りて波无と訓せり。又新撰字鏡魚部に。鯛を太比と訓せるの外に。鱧を載せて。まと太比と訓し。鰒の字を波无と訓せ。甚しきかな。又和漢三才圖會卷五十に。鱧を八ッ目ウナギに充て。大和本草卷十三に。筑紫の方言。海ウナギに充り。皆真の鱧魚を知らざる故に誤れる形り。

鱧魚は。和產詳に。舶來風乾の者。鹽藏の者。稀に有り。本草啓蒙卷十四に。其形狀を載せ。茲に略す。直云。物類品隲卷五に。風乾鱧魚の圖あり。又享和三癸亥の歲。清商孟涵九。活鱧魚數尾を齎して來り。翌文化元甲子の歲。東都に致る。風乾して枯瘦せる者と。形色大に異形り。先年其圖を得て摸寫せ。栗本氏の說と併せ出せること左の如し。

鱧魚真圖

蒙

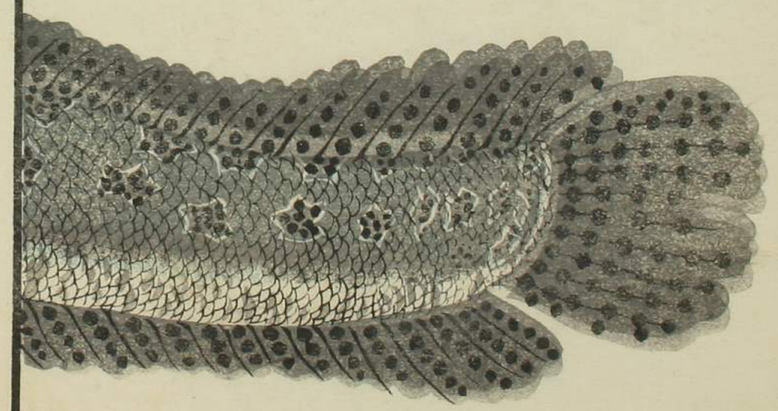
問七星魚有無產于各州縣或止產何處地界等因俱已知悉據涵所聞產地養法俱覆于左

計開

一產于浙江〻蘇合界太湖之內

一此魚項大者約有四五斤

一此魚可消一切毒症如小兒痘瘡等症瘡



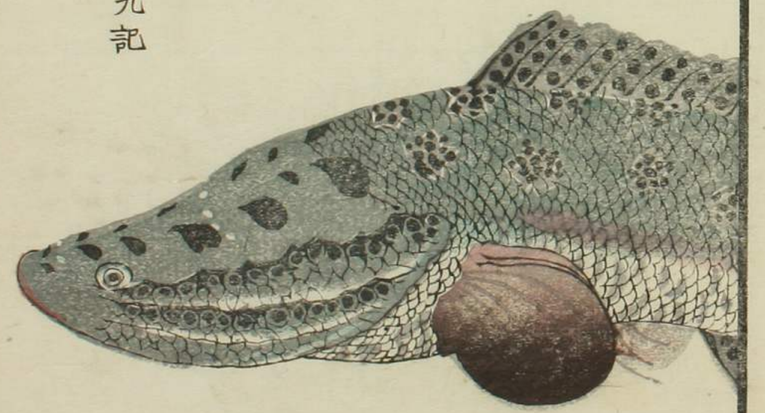
煎湯洒浴出花最輕後食之能復元陽壯力平常日間不能易服

一此魚豢養須放大魚池內其喂養必得腐渣無皮饅頭河泥

一此魚忌服甜酸鹹苦并一切油物而水菓中椒攪更甚

亥十二月

王局番外船主孟涵九記



往歳有命清國商孟涵九者。使獻其北地所産之黑鱧乃崎粤鎮臺。肥田豐後守忠英　上進。文化甲子六月五日也。始儀來十餘頭。今存活者七頭。時余與尚藥常春院中川老先生侍

御前。辱賜觀。因得審其形狀。實是昇平之餘澤。千載之奇遇也。形長體圓。細鱗青黑。有斑點花文。背腹有鬣連尾。無岐。頭尾相等。其斑文頗類蝮蛇狀。甚可憎。全身有涎。粘滑難握。此鰍魚泥鰍之屬。止以花文可觀。又有鱗為異耳。余按與本草時珍所說相符合。可謂能盡其狀矣。此物本邦無産。故先輩以相似之魚強誤充之。皆非也。今也舶來。致存活者于東都。得始親觀之。多年疑惑。一旦豁然發明于此。余欣抃之餘。遂手自寫真。秘奉之頃。中川老先生請再摹之。并孟涵九所筆。産地養法一頁録之。余不敢辞。官暇揮拙毫。而應其需。且添記其異名一二以贈焉。

鱧魚　正字通　音里　一名黑鱧　通雅　吳氏食物本草　七星魚　李本草

備要　本草從新　徐爾貞醫匯

文化甲戌三月十三日　栗本瑞見法眼源昌臧識

鯉魚

明の翁仲仁が痘疹金鏡録（下巻）に云。鮮鱗攻毒湯、治痘出不快、併功倍伏倒膿。鯉魚頭（活者不論大小一個）、丹雄雞頭（去毛一個）、鮮筍尖頭（一兩）、加生薑五片、淡水同煮熟、取出令児飲汁。時加酒漿少許。児食雞冠并筍。餘不用。按ずるに、鯉の字諸の字書に見えず、恐らくは前條の鱧魚なるべし。一説に、鯉の誤なるべし。字畫相似たりとなす。鯉を、諧聲品字箋（丁集息諧）に、似鱣而眼獨赤、亦作鮒とあるべし。鱣の事なり。是非を考ずべし。

直按ずるに、明の朱濟川が痘疹傳心録（巻十五）に、攻毒湯、治痘不易起発。鯉魚（活者。不論大小。一箇）、丹雄雞頭（去毛一箇）、穿山甲（三錢炮）、生姜（五片）、鮮筍尖頭（一兩）、右水煮熟、令児飲汁。時加酒漿少許。児食雞冠筍とありて、鯉を鱧に作れり。是亦字書に見えず。又清の曾香田が痘疹會通（巻四）に、鮮鱗攻毒湯を載せて鯉を鱔に作れり。又張氏醫通（巻十五）に、赤大鱔魚頭に作り。注に如無鱔魚頭、鮒鰤魚代之といへり。鱔魚は、即鱓魚にて。俗にウツボと称する物なり。鱔魚頭に此功ある事、諸本草に見

當らぬ。幼く新書。巻八十仁齋直指小児方論巻五等に。瘡瘡の眼に入るなり。生鰹血を点ずれば良きる事は見えたり。魴鰤魚は。何魚なるか未考へぬ。鯉鱖の二字博識の君子これを辨ずべし。

毬蘭

櫻蘭は。今花姑に多く栽う。暖地の産なり。其苗藤蔓を引て。樹竹に上ること数尺。茎巨く鬚を生ず。夏秋の間挿て能く活ぬ。葉の形擔(トヂリ)に似て鋸歯なく。至りて厚し金邊斑(フクリン)葉(イリ)の種もあり。茎に對生ぬ。夏月葉間に。一寸許の茎を抽き花あり。数十花一處に聚り毬となる。皆下に向ひて開く。形俯せる粉團(ヂマリ)花の如し。一花の大さ三四分五瓣(イツヒラ)なり。瓣邊翻巻す。白色光澤(ツヤ)あり。外に赭黄小萼あり。之を承く。内に心高く起り。重臺となる。又五出(イツヒラ)なり。最小さく。粉紅色なり。光澤あり。中心に一小尖あり。都て茸鬚なし。花謝て蒂残り。來年其蒂に花を生ずる事。他草に異なり。蘭山翁の説に。廣東新語巻二十七に。有毬蘭。開至五十餘朶。團圓如毬。とあるもこれ是なりと云へり。按るに。續脩臺灣府志巻十に。

番繡毬。蔓生葉厚可二錢。花白色。底瓣似通草為之。心微紅而堅明亮如磬。といへり。同物なるべし。

直云。樂齋阿部氏の草木育種後編巻下に。櫻蘭と。毬蘭。なる月記灌園草に充て。亡羊山本氏の百品考前編巻上。番繡球。月記等に充り。二書考ふべし。按るに。

閩書巻百五十南産志巻上に。衣繡毬。藤生。花二簇數十葉。其圓如毬。初開微帯粉紅色。開盡則白と載る。亦櫻蘭なるべし。

蜈蚣蘋

蜈蚣藻を夏。月水田中に生ず。一葉の形。螺髻草の葉に似て狹く薄し。三四寸の莖へ。數葉排生して。恰も蜈蚣の如し。故に名りて。又山椒の一枝葉に似るとりて。山椒藻となる。秋に至りて紅紫色を帯る。宋の陸佃が埤雅巻十五蘋の條に。似槐葉而連生。生道旁淺水中。與萍雜生。秋則紫といふ。即是なり。江邨氏の詩經名物辨解巻一に。陸佃が文を引て。即蜈蚣蘋ノ形狀ニノ。蘋ノ別種ナリ。といへり。蘭山翁の說に。蜈蚣蘋ハ和名なり。埤雅の文に據りて。槐葉蘋の名を命ぜしなり。

直按するに。明の陸鳳儀が金華府志。卷六物産門草部に。蜈蚣蘋の名ありて。形狀を載せず。恐らくは同物ならむ

○又按るに。埤雅の王秋則紫の下。今俗謂之馬藻藻本作藻亦呼紫藻の十字あり。此文と。本綱九卷十陳藏器が説に。馬藻生水中。如馬鬣相連。といへるに据まば。馬藻は。即蜈蚣蘋なるべし。抑藻とは。時珍が説に。馬藻。葉長二三寸兩々對生。といへるに。一葉の寸法はいかばかり。兩々相對ヒし長さの寸なるべし。既に清の徐雪嶠が毛詩名物圖說五卷にも。馬藻葉生於莖。一二寸兩々對生と見えたり。然もぶも。予是を深く考へさに。いかばかり。佗日諸書を探索して。後卷に辨ずべし。

榼藤

榼藤は。南方熱國の産にして。本邦に産せず。晉の嵇含が南方草木狀中卷に。榼藤。依樹蔓生。如通草藤也。其子紫黑色。一名象豆。三年方熟。其殼貯藥。歷年不壞。生南海。解諸藥毒。といへり。此子は。諸州四邊の海濱へ漂流して來る。俗に藻玉といひ。誤認て藻實とする物なり。形は圓扁なり。質は數色なり。本草啓蒙卷十四上に詳に載せ。又

華佗中藏經(巻八)に。腸風下血に。榼藤子皂莢子の二味を用ひ。其餘。咳痺腫痛。五痔脱肛等に榼藤子を用ふる支。本草綱目(巻十八上)に載きば。茲に贅せば。

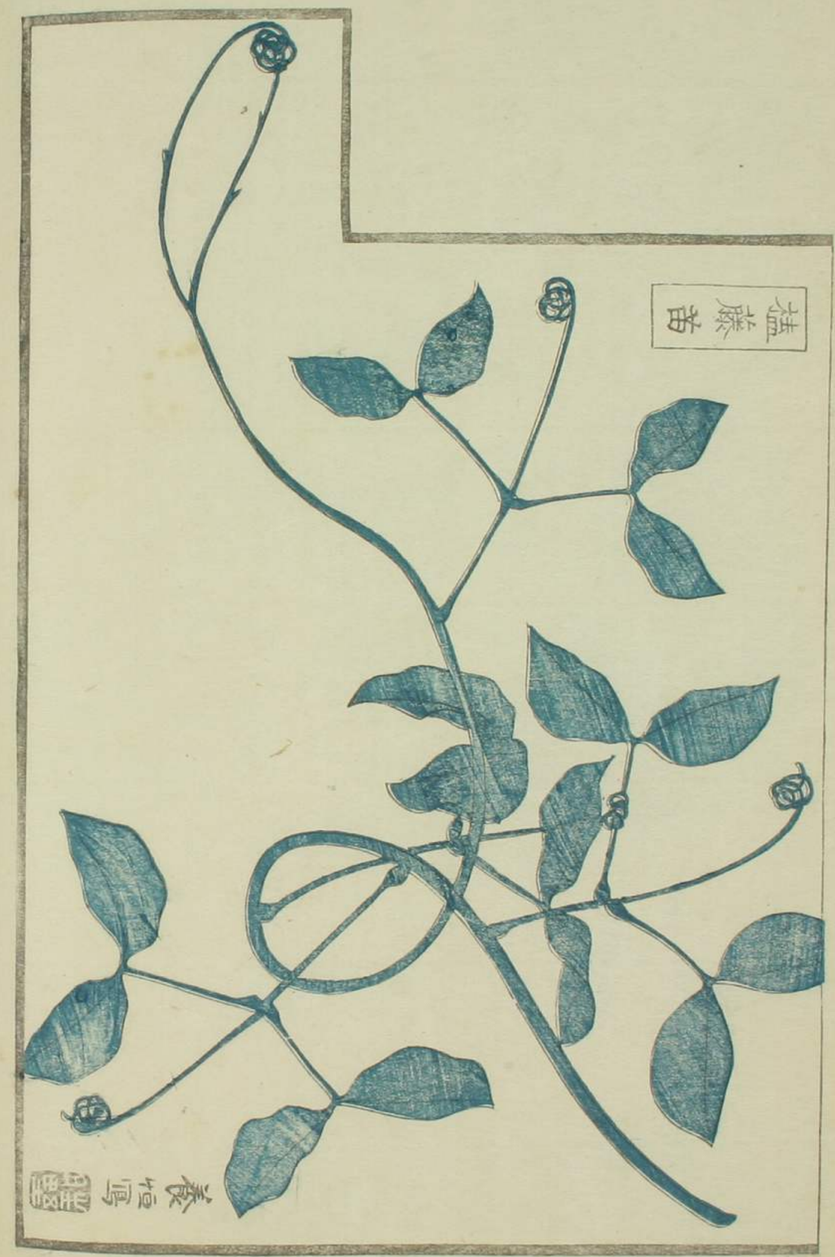
直云。聖濟總録に。榼藤子を用ふる方多し。皆本綱に載たり。今一二を左に抄出す。

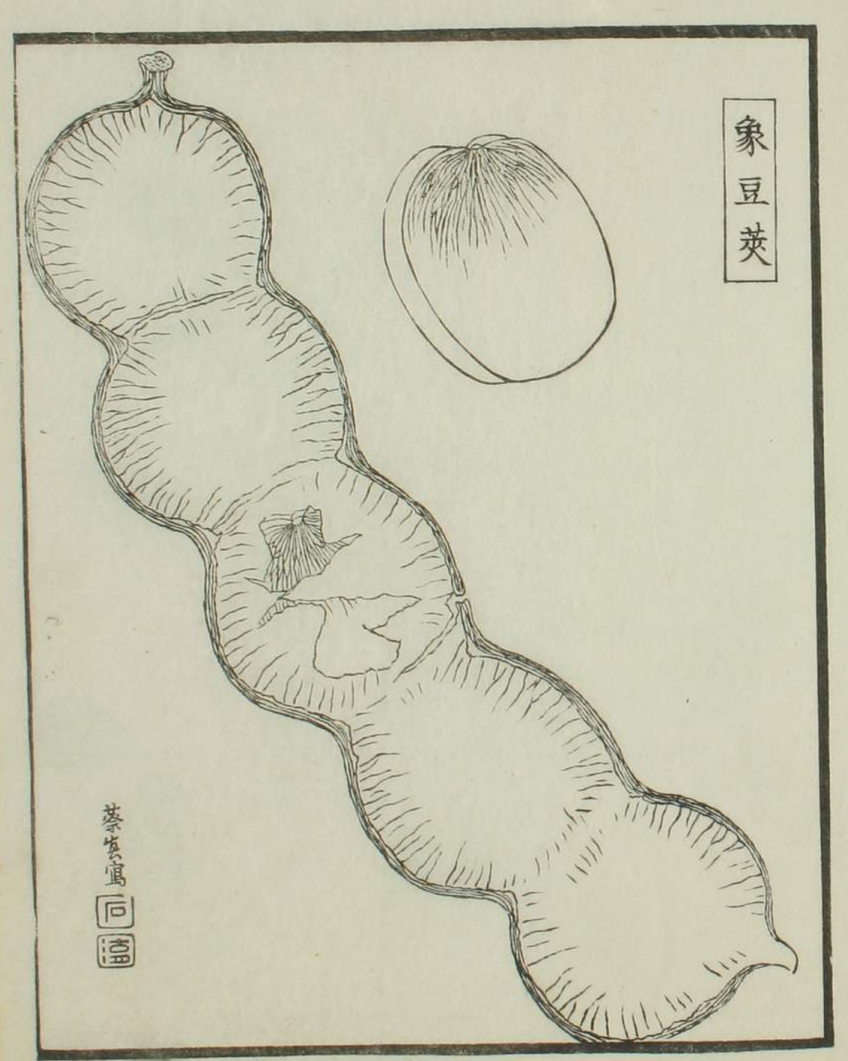
○榼藤子丸　治腸痔下部腫痛。便血後重。坐臥不安。

榼藤子(半兩)　威靈仙　大黄(各二兩)　右三味。擣羅為末。煉蜜和丸如梧桐子大。毎服三十丸。温米飲下。空心食前服(出巻一百四十二)

○榼藤散　治痔瘻久不愈。榼藤子(不以多少)　右一味為散。先以蜜調少許。塗痔瘻瘡上。次用温酒調下一錢匕。食前服(出巻一百四十三)

文化二乙丑年二月。熊野浦大風雨なり。尾鷲浦邊へ。榼藤子新鮮のそゝ多く漂着す。中に莢を存する物あり。其莢長さ二尺餘。幅三寸許。形圖の如く。青褐色なり。藏器に説く。廣州記を引て。角如弓袋〻〻ふ是なり。其子を下種するに能生ず。其藤深緑色にして線稜あり。絶(ヒツ)て絲(ヒツ)凡藤の如く堅し。葉は木通葉に似て厚く。左右各


雞蘇果


象豆莢

二ツ。四葉一蔕あり。末ハ二鬚ありて物ニ纏ふこと
圖社如し。然れども。本州あるハ二三年あり。蔓の長
さ三四尺ニ至リ多くハ枯る。ゑ後熟國の産ハ多きハ有り。
直云。本草啓蒙巻十四上ふ。年久クナレバ。左右各四ニメ
八葉一蔕トナル。其一葉ヲ離セバ。形長ク尖リテ南
天燭葉ノ如し。光澤アリ。蔓ト共ニ深綠色」とハふ。今
山中信古の園中ニ育ひ。蔓の長さ丈許ニ及べ
ども。ふたゝび花實を着けず。悉く四葉一蔕なり。按ず
るに。羅望子苗ハ。皆初年より八葉一蔕あり。其一

葉を離れゝを南天燭葉の如し。されど蔓と葉の莖を
紫褐色なり。草木育種後編下巻ふ。羅望子ハ。葉ニ廣葉
細葉紫莖青莖ニ毛茸のなるあり無なり」とハふべ
種類多くハのりと見ゆ。啓蒙の説。恐らくハ羅望子苗の
形狀を混〳〵謬〳〵そのなるべし。○直又云。草木育種後
編ふ。象豆（モダマ）羅望子（ワニグチモダマ）彎珠等ハ。其實礪石（トイシ）ゝすり。二ケ
處許痂を付け。水ニ二日許浸し置き。横ハ盆中ヘ植
べし〳〵ふ。實ニ然り。甚佳ハ。栽まハ新鮮の實ハ
ども生ぜざるを社多し。如此ゝれば悉く生ず。予も

毎ゐ試もる處ゆ。羅望子彎珠等を次編ゐ辨ず。

蕃柿

俗稱唐ガキ。又珊瑚珠ナスビとも云ふ。苗の高さ四五尺、莖柔弱なり。葉を艾葉ゐ似て大ゐ。楝の葉ゐ似て毛なり。折もぶ惡臭なり。夏月葉間ゐ。五瓣淡黃花を開く。花謝して實を結ふ。形酸漿の殼苞を去るが如く。酸漿なり大なり。熟して赤し。食用ゐ堪ず。搗爛して。胡麻油ゐ浸し置て。金瘡ゐ傅けて佳なりとふ。大和本草卷九ゐ稻若水の說を引きて。天茄子ゐ充つるは誤ゆ

て。群芳譜享部卷五ゐ。蕃柿。一名六月柿。莖似蒿高四五尺。葉似艾花似榴。枝結五實或三四實。一樹二三十實。縛作架最堪觀。火傘火珠未足為喻。草本也。來自西蕃故名。とは是なり。

直云、明の朱國禎が湧幢小品卷二ゐ。六月柿。一名蕃柿を載せ。羣芳譜の文と大同少異ふり

一指石

本州熊野四箇の莊。神内村の山中溪澗ゐ。五尺許の圓石なり。土人指動石と云ふ。双手ふて押動うごかす。少し

も動くことなく。指頭をそて撼せハ忽動く。頗奇なり。
又偶石の両尖相遇て如此なるもの。地震などかく
一轉せず。揺動もすることなし。石亭が雲根志後
編巻二に近江國金勝寺門通りに。六七尺ばかり一指石あり。
事を載せあり。東海道名所圖會巻二に。震巖といふ。又竺
置山城山日光山下野搽名山上野巖島安芸千光寺山淡路等にも
産す。此餘諸州を捜索せば猶多からん。潛確居類書
巻二十七に。一指石。在荆州桐廬。長一丈。高五尺。綴巖谷間。以
手抵之。直按。山堂肆考。宮集巻十九。以手作以一指 輙揺動。人力多則不能移。
元楊維禎。有一指力可動。萬夫莫能移之句とハ。直按
もるなり。明一紗志。巖州府志。桐廬縣志等に據べ。荆州
巖州の誤なり。又荆州府志全部四十巻の中にも。桐
廬縣にしるしたり。
證とすべし。

直云。此石をまた風動石とも。揺動石とも名つく。物
理小識巻七に。鷺島に有風動石。石甚大而遇風動揺。以一
指掇之亦揺。而千指之力反屈焉といひ。清の吳陳琰
が曠園雜志巻下に。薊州九華頂有千佛寺。々後半里。一
石米粉色。縱二丈。廣丈有五尺。曰揺動石。一人悄然推
之輙颭々動。衆推則不動。試作語曰。我其揺則不動。初

動者（道光板説鈴日影移處知之次者石知動也然石中本者作者）日影移處知之次者石知動也然石根山連無纖塵焉といひ清の蔣溥等ゞ欽定盤山志卷三ニ搖動石在千相寺北林木茂密中大若廈屋體圓正承以方右微撼之輙動といへり

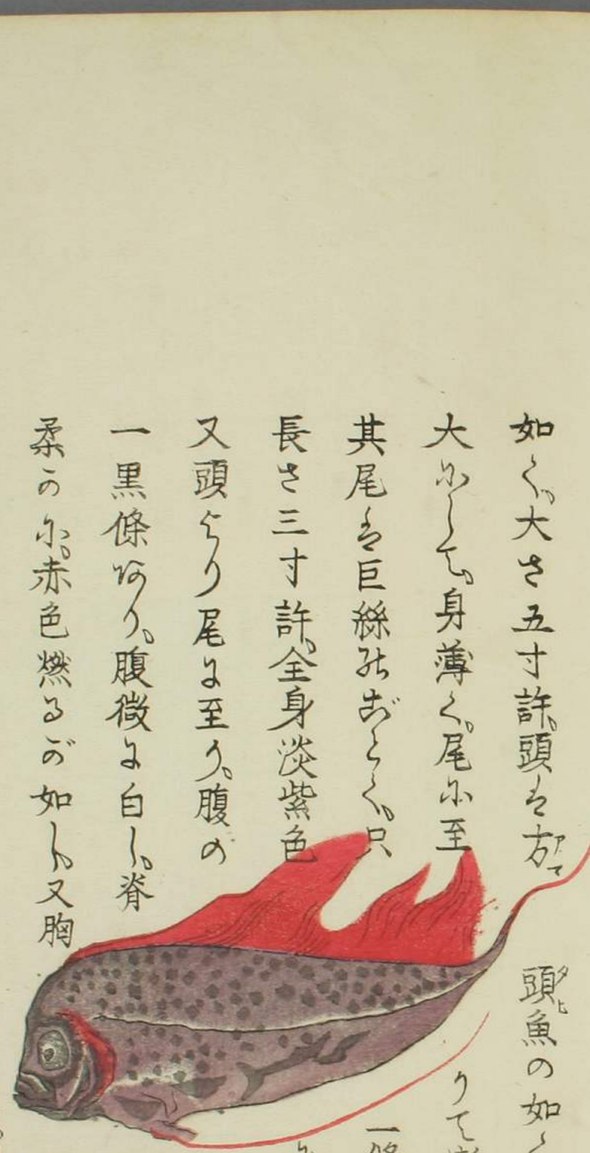
荻蘆竹

俗稱ヨシダケ一名ダンチク筑前○淡竹と和漢同名なり又アセ紀伊といふ暖地の海邊ニ多し形狀蘆或い荻ニ似て大なり高さ丈許葉ハ蜀黍ニ似て濶く長し莖の巨さ大なるハ周圍三寸餘處々ニ節ありて竹の如し農家ハ去年ハ我て藩籬とし春秋ニ枝を切て挿せい能活し筍の味苦し水ニ浸し苦味を去りて食し大和本草卷九ニ瘍醫筍ヲ取テ日ニ曝し楊梅瘡ノ藥ニ加ヘ用レハ能毒氣ヲ泄下ス爲妙藥味苦寒ナル故ナリ直云此根を曝し痛風の藥ニ加ヘ用ふ奇効なり本州の俗方なり此生竹ヲ割リテ炭火ノ上ニワタシ其上ニ炙物ヲ置テアブル火盛ナレハ竹ヤケズ鐵橋ニ換用ヒといふ宋の僧贊寧ゞ筍譜卷上ニ秋蘆竹筍其竹似蘆身如荻蔍冬天不凋挿枝如生筍可食也といふ是形ノ誤ル按ずるに秋ハ荻の誤りなり本草彙言卷十一ニ荻蘆竹ハ作るべしとこうべ

直云。清の莊大中が東安縣志卷四より。蘆荻竹のつ形狀をいたざれど。本條と同物なるべし。又臺灣府志卷十八に。蘆竹似茶生水涯濕處といへるも。亦同物歟ら。蘆竹は同名にして。筍譜荻蘆竹の外にも。まゝ蘆竹と呼ぶ処の竹なり。又本草彙言卷十一に。蘆竹似蘆出揚州東垂。肌理白淨可以爲篪といへるに。邦産にまゝ考へべし。

小異魚

享和二年壬戌の春。蘭山小野先生　台命を蒙りて本州熊野より採藥に。予も紀より從ふ。日高郡三尾の莊。小浦にて小異魚を得たり。土人其名をきくに。形狀圖の如く。大さ五寸許。頭を於て大にして。身薄く。尾に至て其尾も巨絲ばかりにして。長さ三寸許。全身淡紫色又頭より尾に至て。腹の一黑條にして。腹微に白し。脊柔にして。赤色燃るが如し。又胸條にして。これも赤色にして。長さ四寸許。總體麗しき魚なり。此浦にて。時々釣にかゝるとなり。とゝ化州



頭魚の如く窿起し。目いうて漸々細くなり。一條にして赤色。小黑點にして。正中通りに鰭長くして。の下に巨毛一

よも産しゝて方言ゆゑなべし。

松蟲　附鈴蟲

松虫は新撰萬葉集上巻に待蟲と書き假字なり。形西瓜の種子如く正黒色あゝて首小さく尻大に脊窄く腹に黄白色ありて鳴音リンくといふが如し。蟋蟀と同く雄は尻二尾ありて能鳴く。雌は二尾の中間に針ありて鳴くこと能はず。原野草莽中に在りて夜燈を照らすに則火光を慕ひ來りて獲易しといふ。松虫は草根に居り鈴虫

に梢葉に居る。秘傳花鏡巻六に金鐘児似促織身黑而長鋭前豐後其尾皆岐以躍為飛以翼鼓鳴其聲則磬磬々如小鐘然此虫暗則鳴曉即止といふ是松虫なり。直云金鐘児はもと明の劉侗于奕正等が帝京景物略巻三に出づ。花鏡の説は景物畧によて記せしものなり。又明の袁宏道が促織志論條に一種亦微類促織而韻致悠揚加金玉中出温和亮徹聽之令人氣平京師人謂之金鐘児見暗則鳴遇明則止とも見えたり。

○鈴蟲は形促織に似て長小なゝて黄褐色腹は淡黄

色形ち。長き髭ありて。鳴聲チロリンコロリントいふ。用藥須知後編卷四に
如し。本州の俗チンチロリといふ。秘傳花鏡卷六の紡績娘。一名聒々児に充つ。誤なり。紡績娘は
次編に詳かなり。蘭山翁も同書の金琵琶をといへり。
直云。山中信古が說に。花鏡を考ふるに金琵琶は鈴
虫にあらず。蟋蟀の下に出て。形狀を見せず。全く蟋
蟀中の異品なるべし。鈴虫は清の王漁洋いふ處の山
子に充つべし。其文に精華錄卷五に。山中に有虫。聲如擊
磬。甚清越。蜀人謂之山子。又有花名龍爪。甚豔。偶成絶

句。稻熟田家雨又風。枝々龍爪出林紅。數聲清磬不知
處。山子晚啼黃葉中。　又香祖筆記卷九に。蜀道有花名
龍爪。花色殷紅。秋日開。林薄間。甚艶。又有虫。其聲清越。
如擊磬然。かど見えざれども。金琵琶は充つるよりも。稻熟の頃は鳴く。聲如
擊磬といふ文はなりて。山子は充つるも可なるも
きなといへり。今暫く此說は從ふ。○直又云。松虫鈴
虫の二品。後世は至り。其說互は混淆して一定なら
ず。金鐘児を松虫。山子を鈴虫とせり。松岡玄

達の説形り。古事秦曲の野宮より。松虫の聲りんりんと
してといへるより据り形ひべし。蘭山翁も此説を是
とせり。又和漢三才圖會巻五十三大和本草巻十四本草正偽
巻八誹諧篋纏輪巻三等ハ。金鐘児を鈴虫とし、山子を松
虫とせり。夫木和歌鈔第十四より。藤原為顯の歌。百
首歌の五十首の中ハ「琴の音ハかよふを峯の秋風
を。ものの枝松虫の。うゑやそらん。又慈鎮和尚の歌。住
吉社百首御歌より「きゝみよりまつ。このきゝもとの。虫の
音より。をのこのうゑより。松風をあとと載せて。其下ハ

亭子院御門ゟ宇多帝と號ー奉るなり。

延喜七年。

亭子院御門御時。西河行幸せさせ
給ひけるハ。忠岑新和歌序より云。ゆるいひくらし虫
をもとゝ。夜ゝ夜ゝ。ものうそらなりことをそ
へ。ものあるとなれハ。山の端ハ月まりもしらか
ひて。きむの聲ハあやまつ。ある時ハ。雲間の鈴
むしをきゝて。谷ゝ水の音ハいらこのゝ。云云といへる
ゝ据るなるべし。各其證なれハいらべ。予二虫の
古書ハ載るもゝを悉く集めて。別ハ錄し。繁冗形ハ
バ茲ハ贅せず。

緬茄

羣芳譜蔬譜二茄附録に、明の許伯衡が滇南雑記を引きて云、緬茄、出緬甸、大而色紫、帯圓整、蠟色者、佳、今會城絶不可得、多以小者於帯上刻人物鳥獸之形、殊殺風景、過滇中者多市之、而滇中人亦以此贈遠、廣群芳譜巻十七に、宋の劉子翬が詩を載せて云、緬甸實如瓜、垂金粲秋色、誰刻紫瓊瑤、玲瓏投遠客、珍異藥品に云、緬茄児用以抹眼眶去火毒、又能解百毒、形如大栗、上有罩帽、如畫皮様、水磨塗治牙疼效、此品古渡の物藥肆よりもとめ、

て、眼眶を磨き、眼を明らかにす、故に俗に眼茄と名づく、形牛奶茄の如く、大さ七八分、圓長方一形ら、皮を栗に似て厚く堅くして石の如し、一方に帯あり、五瓣にして、圓整にして覆をなしたるごとし、振ればがらがらと鳴る、割りて中に黄肉と種子あり、好事の人、壓口捺子とす、草木の別ちあるべかりき、

直云、天野信景が鹽尾巻二十一に、緬茄と眼茄の事、

王氏彙苑群芳譜滇南雑記などにのせたる諸種、

あらあらに、二三本生せり、半夏の生ずるごとく形り

しぶ。秋の末ミな枯ちべまり。されを南方の温地ハ
らでを長ぜざるゆゑ」といへり。天野氏を享保中の
人ハ久。此頃を新鮮の物多く渡ると見えたり。

鯖魚 附 鰶魚

鯖魚を。本草綱目（巻四十四）ハ出て。邦産詳ならぐ。多識編（巻四）
ハ。古乃志呂（コノシロ）と訓ぜ誤ハり。舜水朱氏談綺（巻下）ハ鯖魚ヲ
コノシロト云フ非也。頭大ニノ。尾ノ方細ク。年ヲ經ル
ニ隨テ頭愈大ニナル。故ニ一名胖頭（ハンタウ）ト云。（直云。南寧府志巻三ハ。鯖魚
鮒ノ外ハ。鰶魚ヲ載セテ。一名胖頭トイフ。同名異物なり。鰶魚モ亦邦産詳ならず。）一二尺ヨリ三
尺ホドニナル也」と見えたり。コノシロを。世人常ハ能
識る魚ハ是ぶ。茲ハ形状をいちべ。明の王思義ガ三才
圖會（第十三函ハ。鱗介類五ハ。）鱗（リン）ハ。鰶（ハン）如（ジ）鰣（ジ）而小。鱗青色。俗呼青鰶（セイハン）。又名青
鱗（セイリン）といひ。閩書南産志（巻下）ハ。鰶魚（ハンギョ）如（ジ）鰣（ジ）而小鱗。名青鰶（セイハン）又
名青鱗（セイリン）以（テ）其鱗脊俱青（ヲ）也。冬月味腴（ユ）といふ是ハ。○一
種コハダと呼ぶもハ。古名都奈之（萬葉集○本列ハ。ともも今此名
を呼ぶ。）形鰶魚（コノシロ）ハ似て細く。五六寸ハ大なるハ見ぶ。鱗
小ハ〳〵て厚く黒點なり。腹下の芒刺。鰶魚（コノシロ）ハ多くし
て。至りて堅し。味も稍輕し。俗ハ鰶魚（コノシロ）の児。或ハ鰣魚（ヒラ）の

兒をいふい非なり。故ゑ本州海部郡出島浦ゑて鱚魚
兒をコハダと呼び。これを本コハダと呼びて別り。閩
書南産志巻下ゑ江鱚魚。三四月有之。味美。但小而多刺。淡
鹹之間。江溪之滙。泉人謂之刺芒。直云。武井撩涯
の魚鑑巻下ゑ。初年をコハダ。二年をコノシロといふ
とあるい誤なり。全く一類二種なり。○難字記巻三ゑ
鱮の字をツナシと訓ぜ。此字考ふべし。訓ぐ。○江鱚魚の一種。西國ゑてマい
カリと呼ぶもゑなり。形も能似てゑく扁ゑ。鱗數密ゑ
つけり。備前ゑり糟漬と為ゑ。京師ゑ來び。
直云。本　邦昔ゑり鰶の字をコノシロと訓び。日本

書紀巻二十五の
ゑり註ゑ。鰶此云舉能之盧と記せり。又和名類聚鈔
巻十九　鰶の下ゑ。四聲字苑を引きて。鱚魚名。似鱭而薄。
細鱗者也。註ゑ。鱚子例反。字亦作鰶。和名古乃之呂と
見え。色葉字類抄巻七ゑも。鱚コノシロ亦作鰶と見え
ゑり。按ずるゑ。鰶又鱈ゑ作り。鱚と同字なり。康熙字
典巻中集ゑ云。集韻鱈與鱚同。類篇鱚或作鱈。清の王
錫侯ぐ字貫巻三十九ゑ云。鱈去聲音霽與鱚同。清の阮
元ぐ經籍纂詁補遺巻六十七下ゑ云。晉書音義引文字集

略曰。蟹亦作鰶又引字林曰。蟹鰶魚出東萊。此等の
説ふて。鯛鰶同字形なること明ら形ら書紀を撰む頃
ら遣唐使のまゐる唐山の事を見聞して。コノシロよ
鯛の字を用ひし形るべし。然るふ近來の説ふ鯛を
コノシロふ用ひしとふ。鱭魚と同物形らといふ。反り
て非形ら。こ紀を雨航雜録巻下よ。鯊魚一名鮵又名蟹
魚文字集略蟹又作鰶字音祭。又音制。といひ。正字通
多集中ふ。鰶鱭字之譌といふ。此二書の誤を襲ひしも
形ら。本草啓蒙巻四十よ。鱭魚の一名ふ蟹魚を載

黄魚即鱭魚

せ。刪るべし。鰶鯛の二音相似たれど。鱭を上聲鯛を
去聲ら。混ぜべからず。又新撰字鏡魚部塵添塩嚢鈔
巻三下學集巻上天台六十巻音義巻三等ふ。さ没くの字を
コノシロふ用ひしことなら。詳ふ予ら著を重訂增
補本草啓蒙巻百十八ふ辨ぜれ。茲ら略せ。

猨

猨の字。又猿俗猒同ふ作る世ふ手ナガザルちゝエン
コウ猨と猴との二物を併せ誤りて一物の名ふ呼べ
るなら本邦古書類ら猿を佐流と訓ぜるも亦
誤りなり。ゆゑふ和産なし。文化六己巳の夏六月。荷蘭の商

八紘譯史云亞毘心域地方極大ゝ黑如漆惟齒目甚白

船儀て寄畧了來る者と同年の冬十一月浪速より本府ゟ轉致して一里山庚申堂ゟ境内ゟて觀物ゑ備ふ

利未亞洲の東北亞毘心域國の産形りといふ形狀常の猴(サル)ゟ大ゟして全身及び頭面唇舌ゟ至るまで皆黑し其毛い長く柔ゑ兩臂至りて長くして身ゑ倍ゟ性慧ゟして馴やすし養ふり菓實の類を喰(バミ)し矢ゞ腹瀉ゟ毎ゟ寒具(ヒジワシ)の類をもて畜ふといふ唐山ゑは猨ゟ品類多しと見ゆ按ずるゟ桂海虞衡志獸志ゟ猨有三種金絲者黃玉面者黑純黑者面亦黑といひ嶺南雜記巻下

小。烏猿。出羅定州及石城。渾身如墨。止眼碧齒白即舌亦
黑也。短身長臂。々倍于身。行走如人。性甚警慧。余攜歸畜
之甚馴。といへる物是なるべし。又埤雅（巻四）に猿臂通肩
といふ。今此猿をもて試るに然らず。惟兩臂長き迄
なり。本草綱目（巻五十 一下）時珍の説に或言其通臂者誤矣
といへり。又明の王濟の日詢手鏡（紀録彙編巻百六十三 收之）にも
辨じ考ふべし。

直云。尊郷贅筆（巻上）に。蜀中産烏猿。性最黠。能解人意。楚
師進於上林。其使者歸。猿長號而絶。宋宗卿徵輿作詩
弔之曰。瀟湘寒月九疑風。盡日哀吟雲水中。借得上林
無限樹。却教歸夢入巴東。とも見えたり。又元の祝穆
の方輿勝覽（巻三十七）新州土産に。桂山有黑猿といひ。清
の王漁洋の居易録（巻十）に李戶部説。蜀有黑猿。通體黝
黑可愛。常于樹上騰跳。足不履地。獵者不能獲といへ
るも同物なるべし。

丹生村大樟樹

本州在田郡。石垣の莊丹生村の。丹生明神社の境内に
樟の大樹五株あり。各周圍二丈餘にして。五株皆切株

より生ぜし萠蘖なり其本幹切株と形ち朽損ちる處
の是ども盤礴して五株の間に連亘せり今其舊幹の
大さを計るに徑り四丈三尺餘周圍十三丈許形ち故
老の傳に むかしこの鹿苑院義滿公金閣寺創立の時此樟
樹を伐り用ふといふ
直云紀伊續風土記巻五十八在田郡第三に相傳ふ足利
將軍義滿公金閣寺を創建せし時此樟を伐きて天
井板に用ひらる今現に金閣寺にある是形ち故老
傳へいふ此樹を伐倒せし時在田川を亘りて前岸

を覆ひしにそいふ往古大樹にありしとて諸國に往々
地名形ちに遺りたるもあれど其樹の現に遺りた
る扶桑木に類地中より堀出る物の外絶えて聞ざ
りしに今此樟本幹を四百餘年の前に伐らるまで
も舊幹より蘖を生じて今現に大樹となりて舊幹
の切株と共に遺りゐるに海内其比なるべしとも
覺へず往古の物の今に存ゐるに誠に奇物といふ
べし」と見えたり
山椒魚本草綱目巻四十四に載ゐる鯢魚の俗
称と名を同うせり此魚の事を本草啓蒙

巻四十ノ詳なり

又山生魚とも書ひ諸州ニ産ひ殊ニ相摸箱根山ノ多く産して名物と形まるをもて世ニ箱根の山椒魚といふ又赤腹（ヲカハラ）同名なり又セング（ワン）魚（越後高田）ともいふ夏月湖水又溪澗中ノ居り冬月ハ陸ノ上り石間或ハ落葉下ノ竄る形状龍盤（ヰモリ）魚ニ似て大さ三四寸（土佐ニハ六七寸のもの）なりと頭圓く蝦蟇の如く全身泥鰌（ドジヤウ）ニ似て四足皆三爪腹微ニ赤色脊ハ黒褐色形ハ而して雄ハ腹瘦雌ハ腹肥ひ箱根ハり乾腊ノして四方ヘ出ひ小児の疳

毒を治ひ物理小識（巻十ノ一）ノ游子六曰閩高山源ニ有黒魚（黒魚同名多）如指大其鱗即皮四足可調粥治小児疳といふ即是歟

直云江戸の人弄花ヲ箱根七湯栞（巻十ノ）ノ山椒魚ニ二種ノり箱根ニ生れる浅地（ケウ）魚といふて大く功もたぎしノ又大山邊ノり出ると旅（ルビ）魚といふてかゝちノ小さくして功ノもしノ價尤高下ノり」といへり○又云或説ノ此魚を明の龔居中ガ外科百効全書の山鰍なりといふ本書を閲るニ巻一ニ諸瘡合口散ノ山鰍

黄泥包煨熟後去泥爲末麻油調搽とゝのうて形状を載せざれど的當ともおもしぐるべし

桃洞遺筆巻之四終